

造形美術教育が、幼児教育・保育にもたらすこと

目白大学 人間学部 子ども学科 助教 佐藤牧子



■はじめに

簡単に自己紹介をさせていただきます。私は、10年ほど保育者として幼稚園・認定こども園に勤務し、その後、小学校教育に少し携わる機会を得て、2年前より目白大学で教育実習の担当として勤務しております。養成校において、造形美術教育の科目を担当したことはございませんが、教員養成校における造形美術教育が担う力に大きな期待を寄せている一人です。今回は貴重な機会をいただきましたので、元保育者として、現在教員養成に関わるものとして、「1.園内研修における取り組み」と「2.教員養成における造形美術教育に寄せる思い」を述べさせていただきます。どうぞ宜しくお願いいたします。

1. 園内研修における取り組み

今年度、幼稚園・保育所3園の保育者を対象とした合同園内研修を行った際の実践をご報告させていただきます。園内研修は、私が定期的に子どもの造形遊びを観察している園などで、隔月、園長や担当保育者と話し合いの上で、その時々にある現場や保育者の課題を取り上げる形で行っています。

<この回で取り上げた保育者の課題>

現場 からの課題	<ul style="list-style-type: none">● 日常保育において、子ども理解が十分でないこと● 子どもの廃材作品などを無造作に扱う場面があること▶ 作品を持ち帰る際に、大袋にいくつかの作品を詰め込むようにして持ち帰らせるため、持ち帰るまでに壊れるモノもある。
-------------	---

<p>佐藤 からの課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●造形遊びにおいて、子どもの主体性を尊重すること、保育者の援助のラインが曖昧であること ●子どもが何を、何で、どのようにしてモノ作りを行っているのかを把握すること <p>▶子どもの作ったモノや、モノ作りのプロセスを見ると、多くの葛藤の跡に出会う。その葛藤が、その子の育ちにおいて必要な葛藤であればよいが、場合によっては、造形遊びや表現への意欲を減退させることに繋がる可能性も感じられる。材料の吟味、道具の準備・整備状況など、子どもが本来の思いを十分に発揮できる環境構成や援助を行う必要があると考える。</p>
---------------------	---



写真①



写真②



写真③



写真④

【写真①】 ガムテープが切れずに長時間におよび葛藤している場面

【写真②】 セロハンテープ台のカーター刃が曲がっていて切れ味が悪かった為、テープを切ろうとして何度も接着面を触った結果、粘着力を失った大量のセロハンテープが貼り付いている作品

【写真③】 使用可能なガムテープ（茶色）を使い、作られた「アイスクリームやさん」

茶色のガムテープは、子どもが表現したかったイメージを具現化する材料だったのだろうか。

【写真④】 段ボール箱と 2L の空ペットボトルをセロハンテープで接着しようとして葛藤している場面
これらは、保育者が何らかの意図を見出している葛藤場面であれば良いのですが、造形遊びへの理解不足から起きている事柄であれば、見直しの余地があると思われるのです。

これらの課題から、研修プログラムは、第一部：座学「保育の基本は“子ども理解”から始まる」、
第二部：実践「追体験から子どもを理解する」としました。

本日のガイドライン

第一部 講義「保育の基本は“子ども理解”から始まる」

- (1) 保育とは
- (2) 保育実践の循環
- (3) SOAP の視点を保育に取り入れる
- (4) まとめ

第二部 実践「追体験から子どもを理解する」

- (1) 活動について
- (2) 実践：子どもの作品を再現する
- (3) 情報共有
- (4) ふりかえり

合同園内研修(2020.11.22) M.Sato

◀全体プログラム（スライドの一部）

▼第二部 実践

「追体験から子どもを理解する」

活動の Point を 3 点提示し、Point

①②では、保育者が子どもの作品

を大人の手で作り変えることが目

的ではなく、じっくり観察をして

子どもの格闘の跡も含めて再現し、

追体験することを明確化しました。

Point③では、活動後の情報共有の

基準として 3 観点を提示しました。

(1)工夫が感じられた工程

(2)苦労が感じられた工程

(3)援助の不足、または援助の必要

性を感じたところ（材料、道具、

環境構成、人的援助など）

第二部 実践「追体験から子どもを理解する」

(1)活動について

背景：子どもを主体とした保育の難しさ

ねらい：子どもの主体的な活動を下支えするために具体的な課題を見つける。

内容：子どもの作品(主体的に作ったもの)を再現することで、子どもの体験を追体験する。追体験を通して、課題を見つける。

Point① 綺麗に作る事が目的ではない。
Point② 子どもの作品をじっくり見る。
Point③ ワークシートの観点をおさえて取り組む。

合同園内研修(2020.11.22) M.Sato

第二部「追体験から子どもを理解する」は、子どもが**造形遊びで作ったモノを忠実に再現すること**を通して、子どもの作ったモノをじっくり観察し、どのようなプロセスで造形遊びを行っているのかについて、保育者自身が体験をもって知る機会にしたいと考えました。参加者 20 名が 2～3 人組に分かれて計 9 個の作品を再現する中で、同時に「鑑賞の視点」を養うことも目的に加えました。

開始するとすぐに作品を手に取り、「**どうなっているのかな？**」と言いながら作品を色々な角度から観察し、ペアになった保育者同士で気づいたことや仮説を共有するなど、活発な意見のやり取りが行われました。普段は、子どもが作ったモノに対して「**何を作ったのか？**」という点にばかりに注目が集まる傾向がありますが、今回は子どもと同じ道具や材料で再現することが求められていたため、使われている材料、接着方法、構造（バランスなど）、道具について注目している点が大きな違いであったと言えます。また、再現する中で「**どうしてこれを作ろうと思ったのだろう？**」という問いが自然に生まれてきたことも印象的でした。つまり、追体験によりこれまでは「**何を作ったのか？**」という目の前にある結果だけを点で見る傾向があったところから、作る動機となる背景～作るプロセスに目が向けられた点に効果を感じました。

今回の追体験は、保育者自身が新たにモノを生み出す創造活動ではなく、再現的な活動であったため、創造活動に苦手意識をもつ保育者にとっても取り組みやすい活動であったことが功を奏し、参加者が同じ熱量で子どもの作ったモノを通して「造形遊び」と「子ども自身」にじっくりと向き合う機会になりました。これを機に、「子どもらしいダイナミックな作品」といった言葉で片付けずに、「本当はもっと表現したいことがあるかもしれない」という視点に立ち、材料、道具をはじめとする環境構成を見直すこと、さらにモノ作りのプロセスに目を向けることで、子ども理解を深め、同時に幼児の造形遊びも有意義なものにしていきましょう、ということで研修をまとめました。

以下、活動を通して全体共有された内容の一部を紹介します。



作品①：ロケット（3歳）

- 難しかった点
 - ・ 円柱に円柱をセロハンテープで貼る作業
 - ・ 倒れないようにバランスを取りながら材料を組むこと
- 気づき
 - ・ 中途半端に思えたトイレットペーパーの芯の数は、必要な数だった。

■ 感想：一見シンプルに見えるが、実際に作ってみると、大人が2人で取り組んでも難しかった。

3歳児がいったいどのように作ったのか、いまだに想像ができない。



作品②：VRゴーグル（5歳）

■ 必要な環境構成、援助など

- ・ 直接、箱に数字が書かれていたが、実際に再現してみると箱が柔らかくてなかなか書けなかった。

数字を別紙に書いて貼り付けられるように、画用紙などが準備してあるとよかった。

■感想：2人ともVRゴーグルを使用していないので、作りながらこういうものかと教えられた。

細部をよく見ると、箱の奥に小さな人が描かれており、のぞいた状態が再現されていて驚いた。



作品③：銃（5歳）

■難しかった点

- ・トイレットペーパーの芯を7本組んでガムテープで止めること
- ・5歳児でもガムテープを1人で切って貼るのは大変

■気づき：カップの凹みは、ガムテープを貼る際に手に力が入ってできた跡だった。

■必要な環境構成、援助など

- ・この日だけ特別にあったピンクガムテープを選んでふんだんに使っていることから、普段はガムテープを1色（茶色）しか準備していないが、色の種類がたくさんあることで、子どもがイメージを膨らませて表現（具現化）する手助けになると感じた。

■感想：再現してみると、ガムテープの貼り方や素材のゆがみ、手の跡が残っていたことがわかり、

子どもの試行錯誤や心の動きが手に取るようにわかった。



作品④：餃子（5歳）

■気づき

- ・餃子を開けると小さな球体を組み合わせた具があり、格子状の線によりシワ感が表現されていた。
- ・具が潰れないように指先を使い丁寧に包まれており、餃子の丸みもしっかり再現されていた。

■感想：一見するとシンプルな粘土作品だか、再現してみると、実は随所に細かな表現がなされていることや、1つ1つの球体は具材の種類を意味しているのではないかと思い感動した。さらに、料理のプロセスが再現されていることから、日頃から家庭で料理の手伝いをしていることも感じられ、目に見えない親子関係まで見えた気がしてよかった。

■その他、追体験の感想

- ・追体験を通して、子どもたちがどのようにワクワクしていたのか、工夫して考えていたのかを感じられると同時に、そうして造り上げたものが、どれほど大切な物なのかを想像することができた。
- ・保育中は、子どもの作ったものをじっくり見ることがない(時間がない)ため、ついありふれた言葉(いいね！上手だね！など)でまとめがちだが、子どもを理解するためにはここに時間をかけなければならないのだと感じた。
- ・追体験を通して子どもたちと同じ目線に立とうとしたことで、課題が見え、次はこういうことを提供したいと思いつく事が出来てとても楽しかった。
- ・何を作るか、実は子どもは計画的に考えながら進めていることが感じられた。
- ・子どもはモノ作りにおいて、大人が気付かないようなことにも工夫をこらしていることがわかった。

その他、再現された作品の一部



2. 教員養成における造形美術教育に寄せる思い

学生が実習を終えて帰ってくると、多かれ少なかれ「理想と現実のギャップ」または「大学の講義と現場のギャップ」について口にします。造形遊び（表現）に関しても、責任実習などで自分の挑戦してみたいと思っていることが必ずしも受け入れられるわけではありません。背景の1つには、幼児教育・保育（以下、保育）における造形遊びが、幼稚園教育要領等において方向目標である領域（表現）に位置していることと、保育を担う園の多くが独自性を打ち出す私立園であるという点にあると思われまます。よって、「幼児の造形遊び」の扱いや解釈は、園や保育者個人の影響を大きく受けているのが実態です。例えば、自由な表現活動としての造形遊びを全面に打ち出す園もあれば、保護者が我が子と他児を比較することへの配慮から、作品展では見本と瓜二つの作品が園児の数だけ並ぶ園もあります。この点が幼児の造形遊びを一括りに語ることを難しくしている所以かと思えます。そしてこれは、紛れもなく学生が就職してから対峙する世界でもあります。

そういう中だからこそ、「幼児の造形遊びはこうあるべきだ」という1つの指針があることは重要であると思えます。しかし一方で、そのことが「理想」として存在することによって「現実」との間にギャップがあるかのような錯覚を起こすことは避けたいと考えています。「理想と現実」つまり「0か100」かの世界は、実際には現実ではありません。これから生きる学生にも、子どもの将来を担う保育者にも、「0か100」の世界ではなく、その間を面白がりながら、あの手この手でクリエイティビティーを発揮して、自分らしく逞しく生きて欲しいと願います。そう考えると、学生が身につけるべき内容と科目の特徴から、自ずとそれを担う科目は造形美術教育になると、私は考えているのです。私自身、造形美術のスキルを特段持ち合わせていないにも関わらず、科目の持つ考えのようなものに、これまでも沢山

助けられてきたと感じています。当然のことながら、造形美術教育は一部の才能に恵まれた人のための科目ではなく、広く開かれた科目です。造形美術教育を広義にとらえることで、多くの学生が恩恵を受け、その先で教育・保育の現場にいる子どもたちがその恩恵を受けるという循環が起きることを願うのです。以下、保育現場で生きる造形美術教育ということで3点ほど伝えさせていただきます。

◆【お友達と仲良くしましょう】と造形美術教育

「お友達と仲良くしましょう」は、子どものいる現場ではよく耳にするフレーズですが、本当の意味で幼児に理解してもらおうとすると、実はとても抽象的で難しい言葉です。どんなテクニックを使っても「多様な相手を受容する」という核心を言葉で幼児に伝えることは困難と言えます。しかし、保育場面においては、子どもの作ったモノをみんなの前で1つ1つ取り上げて、「ここが面白いね!」「これはどうやって作ったの?」などと、日頃から子どもの作品を使って鑑賞活動を行っている、子どもたちは自分以外の人の作ったモノに対しても興味をもって見るようになります。その結果、表現には色々あっていいことを知ると同時に、互いの違いについて魅力と価値を感じながら受け入れていくようになります。その表れとして、お迎えに来た母親を保育室に誘い、保育室に飾られている友達の作品のいいところを1つ1つ説明している子どもが現れたり、子ども同士の会話の中で、「〇〇君ってここがすごいよね!」「これは〇〇ちゃんに聞こう!」という言葉が自然に発せられるようになったりします。

「お友達と仲良くしましょう」をはじめ、教育現場には一見簡単そうであるが実はとても難しく難しい概念を持つ言葉が沢山あります。しかし方法を変えれば、直接的な言葉を使わなくても幼児が核心に迫ることも可能だということを学生には知ってほしいと思うのです。

◆【子ども理解】【多角的視点】と造形美術教育

保育の基本となる「子ども理解」には、当然のことながら「多角的視点」が必要です。しかし、実際には保育現場で色々なことにさらされているうちに自己防御に走り、多角的視点を失い、しばしば自分の教育観・保育観に固執してしまう例があります。また実際、経験年数を抜きにして互いの意見を対等に交換し合うことは容易ではありません。しかし、今回、紹介させていただいた園内研修「子どもの造形遊びを体験する」においては、「作品の解釈」が問いではなく、「作品自体が物理的にどのように作られているか」を主題としたことにより、経験年数や立場を超えて、通常よりも明らかに意見交換が活

発になされ、結果として子ども理解も深まりました。（たまたま居合わせた実習生も参加してくれました。）つまり、例え実習生であっても、新人保育者であっても、子どもの作ったモノに真摯な態度で向き合うことにより、経験年数を超えた“力”が得られるのだと理解できます。

◆【保護者対応】と造形美術教育

保育者養成校に通う学生を対象とした調査に（阿部・村井, 2019）によると、「仕事につくにあたっての不安」の1位は、保護者対応のようです。実際の保育現場においても、この問題は保育者を悩ます大きな問題です。そういう中で、ある園では保護者が集まる際、必ず全員が手を動かして何か（バザーで売る商品、お遊戯会の衣装など）を作りながら話をするようにしているといいます。それは、手を動かさずに話し合いを行う場合に比べて、格段にトラブルが起き難いということを経験知として知っているからだと言います。モノ作りは子どもだけの特権ではないと認識していることが、教育・保育の現場で困った際に学生を助けることになると思うのです。

■おわりに

改めて、造形美術教育の持つ魅力は、「おもしろがる力」ということに集約されると思います。おもしろがれば、初めて出会う出来事も、多様な価値観も人も、理想と現実にギャップを感じることもあっても、それは前向きに「おもしろがって向き合う事柄」でしかありません。その力を持つ造形美術教育が、教員養成校における科目の中核を担い、しなやかで逞しい教育者・保育者を子どもたちの待つ教育現場に輩出できることを願います。

後半は、「造形美術教育ファンからのお願い」のような形になってしまいましたが、私も引き続き子どもと教育のために地道に活動を続けたいと思います。この度はこのような貴重な機会をいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。今後とも宜しくお願い申し上げます。